2026.11.2.

アンチへの反論　よだきんぼさん　統一教会の教えを否定する聖句

2026.10.23

福田ますみさんを紀藤正樹氏が訴えた裁判公判　傍聴しました

統一教会の教えを否定する聖句①

「これは、その翼を握って裂かなければならない。ただし引き離してはならない。祭司はこれを祭壇の上で、火の上のたきぎの上で燔祭として焼かなければならない。これは火祭であって、主にささげる香ばしいかおりである。」

(レビ記 1 章 17 節)

統一教会ではアブラハムが山鳩、子鳩を二つに裂かなかったことがサタンの侵入を許したと教えていますが、上記聖句において鳩の捧げものは「引き離してはならない」と書かれています。アブラハムは正しい手順を踏んでいるのです。

【小笠原の反論(10/27)】

レビ記 1 章 17 節は、モーセに対して、家畜（雄牛や雄羊）を焼いて捧げる時の捧げ方を指示したものですね。ご指摘の点は、創世記 15 章 9 節で、アブラハムに対して命じたものですが、焼いて捧げよとか言っていないし、雌牛や雌山羊を捧げよと指定しているので、この２つは別のものではないですか？レビ記と創世記を同一視して、統一教会を否定する根拠とするのは、おかしいと思います。

【よだきんぼさんの再反論(10/29)】

確かにこの２つは別のものですが、アブラハムの時代のルールがレビ記に反映されている（鳥は引き離してはならない）と解釈するのが一般的ですし、私もそう思っています。しかし、それでは納得できないとおっしゃられるのであれば別の視点からアブラハムは失敗していないという根拠を提示させていただきます。

創世記１５章１０節の儀式は古代中東で広く行われていた契約の儀式です。部族間での平和条約や同盟条約を結ぶ時にこの儀式を行ったと言われています。動物を引き裂き、

その間を契約の当事者が通ることで契約が結ばれました。この契約を破った場合、「引き裂かれた動物のような運命を受ける」ということ意味しました。そもそもサタンの分別を意味するようなものではないのです。

この儀式の意味は聖書からも伺えます。
「わたしの契約を破り、わたしの前に立てた契約の定めに従わない人々を、わたしは彼らが二つに裂いて、その二つの間を通った子牛のようにする。――」（エレミヤ 34：18）

そしてその儀式の様式に沿ってアブラハムは神さまと契約（アブラハム契約）したのです。ちなみに山ばとと家ばとは二羽で対とみなし両側に並べたと伝承されています。この儀式に問題なかったことは次の聖書箇所（１５章１７節）からも伺えます。

17 やがて日は入り、暗やみになった時、煙の立つかまど、炎の出るたいまつが、裂いたものの間を通り過ぎた。

煙や炎は神の臨在のしるしです。クリスチャンはこのしるしのことを「シャカイナ・グローリー」と呼んでいます。例えば出エジプト記 13:21～22 に書かれている「雲の柱」、「火の柱」も神の臨在のしるしです。煙や雲、火や炎は典型的な「シャカイナ・グローリー」です。１７節は神が儀式に沿って裂いたものの間を通り過ぎたことを意味しています。つまりこの契約は有効だということです。また、それは同時に儀式は問題なかったことを意味していると思われます。

そして、ここが重要なのですが、裂いたものの間を通り過ぎたのは神さまだけです。この誓約を守る義務があるのは神だけなのです。それ故、アブラハム契約は人間側が責任を負わない無条件契約と呼ばれているのです。ご忠告いたしますが、アブラハム契約が理解できていないと聖書を理解することはほぼ不可能ですよ。聖書の背骨と呼ばれる所以です。

【小笠原の再反論(11/2)】
「創世記１５章１０節の儀式は古代中東で広く行われていた契約の儀式です」とのこと

ですが、これは私は知りませんでした。大変参考になります。
ただそうすると、よだきんぼさんの趣旨からすると、やはり供え物を割くということは契約に際して重要なことであり、アブラハムが鳩を割かなかったことは、契約に瑕疵があった、ということになると思います。
実際、創世記 15 章 10 節以降を読むと、アブラハムは契約の儀式の後、恐怖に襲われています。
「アブラムはこれらのものをみな持ってきて、真ん中で二つに切り裂き、切り裂いたものを互いに向かい合わせておいた。鳥は切り裂かなかった。猛禽がこれらの死体の上に降りてくると、アブラムはそれを追い払った。日が沈みかけた頃、アブラムは深い眠りに落ち、恐怖と深い闇が彼を襲った。主はアブラムに言われた。「あなたはこのことをよく覚えておきなさい。あなたの子孫は異国の地で寄留者となり 400 年の間奴隷として使え苦しめられる。」
正しく契約の儀式をおこなったなら、なぜアブラハムは恐怖に襲われたのでしょうか。
そして神はなぜ、子孫が異国の地で 400 年奴隷となる、といわれたのでしょうか。
契約自体は有効としても、そこに瑕疵があったから、イサク献祭という捧げものを通して、契約を完成させたと見るのが、妥当だと考えます。これが、原理講論の考え方であって、旧約聖書の記述と矛盾はないと思います。

2026.10.23
福田ますみさんを紀藤正樹氏が訴えた裁判公判　傍聴しました
統一教会の教えを否定する聖句②
「そのことがまだ起らない今のうちに、あなたがたに言っておく。いよいよ事が起ったとき、わたしがそれであることを、あなたがたが信じるためである。」

「いよいよ事が起ったとき」とはイエスが語った未来の出来事がその通りに起きたことを意味します。全知の神でなければ未来を予知することはできません。そして預言の成就を目の当たりにした時にイエスが神であることを信じることが出来るとイエス様はおっしゃっているのです。このように言うことが出来るのは神の預言は全て成就するということが前提でなければ言えないことです。統一教会が教える預言の二面性を聖書は否定しています。

ちなみに「わたしがそれである」という言い回しはモーセが神様のことを「どうお呼びすればよいですか」と問うた時の返事と同じなのです。つまり、「わたしがそれである」とはイエスご自身が神であるとおっしゃっているのです。イエス様が神であることを否定する統一教会の教えは明確に誤りです。

聖書の神様は全く根拠もなしに「信じろ！」とは言っておりません。「未来を予言するから、その成就のあかつきには信じろ」と言っています。イザヤ書や申命記にも同様の趣旨の記述があります。

「いよいよ事が起ったとき」の事例を一つ挙げておきます。
「エルサレムが野営を張った軍隊に囲まれるのを見たなら、その時、その荒廃が近づいたことを知りなさい。その時、ユダヤにいる者は山に逃げ始めないさい。都の中にいる者はそこを出なさい。田舎にいる者は都の中に入ってはなりません」　（ルカ 21：20, 21）

エルサレムの都は紀元 70 年に、ティトゥスに指揮されたローマ軍に包囲され、陥落しました。その時、多くのユダヤ人はこの町に逃げ込みました。聖なる神の都に逃げ込めば、その町が、また神殿が、自分たちを守ってくれると信じたのでしょう。その結 果、当時の歴史書には死者 110 万人、捕虜として 60 万人が連れ去られたとあります。 当時のエルサレムの人口は 70 万人だったと言いますから、いかに多くの人々がこの町 の中に逃げ込んだか、ということになります。 一方、イエス様の言葉を信じたクリスチャンは山へ逃げたようです。（※エルサレムの包囲網は一度解かれました、その隙に逃げたようです）エルサレムの 町自体、小高い丘の上にありましたが、ここで言う「山」とはもっと高い山、ヨルダ ン川東側のペレヤ地方を意味したようです。しかし場所はどこであっても、イエス様 の要点は、エルサレムの都から離れて、人里離れたさみしい所へ逃げよ、ということ だったでしょう

多くのユダヤ人はエルサレムに籠ったのに、クリスチャンが逃げたことをユダヤ教のラビであるヨハナン・ベン・ザッカイ（彼は伝染病で死んだ死体を装ってエルサレムの脱

出に成功)は「あいつら逃げやがった、これからは村八分だ」とクリスチャンを批判している記録を残しているので、イエス様のことばを信じエルサレムから逃げたことは事実であると思われます。

直接イエス様から聞いたわけではありませんが、多くの聖書預言が実現しているが故に私もまたイエス様が神であることを信じる者なのです。

【小笠原の反論(10/27)】

この聖句の出典が書かれていませんが、ヨハネ書第 13 章 19 節と思います。ヨハネ書 13 章は、弟子のイスカリオテのユダがイエス様を裏切ろうという考えを持ち、それをイエス様が察知して、弟子一人一人の足を洗う場面があって、19 節はそれに続く言葉です。

あれだけ愛した弟子なのに、イエス様を裏切ろうとする者がいて、それでも愛そうとされるイエス様の悲痛な思い、その場面を想像するだけで、心が引き裂かれそうになります。

原理講論第 3 章終末論（二）　終末の徴候に関する聖句に、「ヨハネ福音書一二章 48 節には、イエスを捨てて、そのみ言を受け入れない人を裁くものがあるが、イエスが語られたそのみ言が、終わりの日にその人を裁くであろう、と記録されており」という部分がありますが、これもよだきんぼさんの言うところの「いよいよ事が起ったとき」のことなのでしょう。この部分は、さきほどのヨハネ書 13 章の直前の聖句を引用しているのですが、イエス様を捨てて言うことを聞かない人がいることが、どうして神の予定と言えるのか、そうではなくて、イエス様の言うことを聞くように、伝える方が、自然ではないでしょうか。

その意味でも、この聖句が、統一教会を否定するものであるとは言えません。

なお、山に逃げるべきだ、という聖句の話は知りませんでした。参考になります。

【よだきんぼさんの再反論(10/30)】

＞これもよだきんぼさんの言うところの「いよいよ事が起ったとき」のことなのでしょう。

違います。ヨハネ書第 13 章 19 節「いよいよ事が起ったとき」とはユダの裏切りとイエ

スの磔刑を指しています。どちらも旧約聖書に預言されていることです。そしてそれは成就しました。未来の出来事は神でなければ分かりません。それ故イエス様は「わたしがそれである（神である）」と言ったのです。

小笠原さんの認識の過ちは、ユダの裏切りがイエス様の磔刑に必要不可欠であったと認識していることです。ユダの裏切りが無かったとしても他の方法でイエスは十字架に架かっていたと思います。ユダの裏切りが無く、ユダヤ人たちがイエス様をメシアと受け入れていたら、イエス様はイスラエルの王として祭り上げられることになるでしょう。そうすれば今度はローマ帝国がイエス様を磔刑に処したはずです。実際、ユダヤ人達は「コイツはユダヤ人の王だと言っているぞ、ユダヤの王を名乗るということはローマに対する反逆罪だろ」と言ってピラトに引き渡したわけですから。

それに、悪を用いて神の計画を成就するのは神の十八番ですよ。
「あなたがたはわたしに対して悪をたくらんだが、神はそれを良きに変らせて、今日のように多くの民の命を救おうと計らわれました。」（創世記２０章５０節）

イエス様が十字架に架かられたのは最初からの神の予定です。
「この方は、神の定めた計画と予知によって引き渡されたのです」（使徒言行録 2 章 23 節）

「 まことに、ヘロデとポンテオ・ピラトとは、異邦人らやイスラエルの民と一緒になって、この都に集まり、あなたから油を注がれた聖なる僕イエスに逆らい、 み手とみ旨とによって、あらかじめ定められていたことを、なし遂げたのです。」（使徒言行録 4 章 27～28 節）

「人の子が来たのは、仕えられるためではなく仕えるためであり、多くの人のために命を与えるためです」（マタイ 20:28）

「父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛して下さるのである。命を捨てるのは、それを再び得るためである。だれかが、わたしからそれを取り去るのではない。

わたしが、自分からそれを捨てるのである。わたしには、それを捨てる力があり、またそれを受ける力もある。これはわたしの父から授かった定めである」。（ヨハネ 10：17～18）

「しかも彼を砕くことは主のみ旨であり、主は彼を悩まされた。彼が自分を、とがの供え物となすとき、その子孫を見ることができ、その命をながくすることができる。かつ主のみ旨が彼の手によって栄える。彼は自分の魂の苦しみにより光を見て満足する。義なるわがしもべはその知識によって、多くの人を義とし、また彼らの不義を負う。それゆえ、わたしは彼に大いなる者と共に物を分かち取らせる。彼は強い者と共に獲物を分かち取る。これは彼が死にいたるまで、自分の魂をそそぎだし、とがある者と共に数えられたからである。しかも彼は多くの人の罪を負い、とがある者のためにとりなしをした。」（イザヤ５３章１０節～１２節）

レビ記を読めばわかるのですが罪の償いには血の代償が求められます。
レビ記 17 章 11 節 「生き物の命は血の中にあるからである。…血はその中の命によって贖いをするのである」 旧約の贖罪制度の中心で、血が「命」を象徴し、罪の贖いのために流されるべきものとして位置づけられています。
レビ記 8 章 15 節（罪のためのいけにえ） 祭壇に血が塗られ、残りが土台に注がれることで「贖い」が行われると説明されています 。 これは「罪のためのいけにえ」が血によって成り立つことを示す具体的な儀式です。

旧約で記されたこれらの儀式はイエスの十字架を理解させるための視聴覚教材でした。使徒たちもそのことをよく理解しています。

ヘブル人への手紙 9 章 22 節 「血を流すことなしには、罪の赦しはあり得ない」
旧約の原則を総括し、キリストの十字架の血が完全な贖いであることを示す中心的な聖句です。
ヘブル 9 章 12–14 節 キリストが「御自身の血によって…永遠の贖いを成し遂げられた」と語られます 。 旧約の動物の血ではなく、キリストの血が完全な贖いをもたらすと説明されています。

イエス様は「世の罪を取り除く小羊」と呼ばれたでしょう。過ぎ越しの祭りに屠られる小羊はイエス様の型です。イエス様も過ぎ越しの祭りの時期に、ちょうど屠られる時間（午後３時）命を落としました。 しかし、それだけだったら私たちには希望は無かったことでしょう。ですが復活し、生き返って死を突き破ったのです。
「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」。
かかとは砕かれましたが（磔刑に処せられましたが)、悪魔のかしらを完全に砕いた（完全な贖いをやり遂げた）のですよ。

ところで、私は先のコメントで統一教会の説く「予言（預言）の二面性」と「イエス様の神性（神であること)」を否定する聖句としてヨハネ書第 13 章 19 節を取りあげたつもりですが、「イエス様が神であることは間違いである」という主張はされないのですか？

【小笠原の再反論(11/2)】
＞小笠原さんの認識の過ちは、ユダの裏切りがイエス様の磔刑に必要不可欠であったと認識していることです。
とお書きになっていますが、別にユダに限ったことではありません。先例ヨハネ、ヤコブを初めとして、全ユダヤ人がイエス様を裏切ったと考えています。
イエス様を十字架につけることが唯一の予定ではなく、十字架につけられないで神の国を作ることも予定されていたというのが、統一原理の「統一教会の説く「予言（預言）の二面性」」ということです。
これについては、再反論④でご説明するので、ここでは省略します。
また、「イエス様が神であることは間違いである」と言う主張ですが、統一教会では、そう言っているわけではありません。
第７章キリスト論（二)「創造目的の完成から見た人間とイエス」にこう書いてあります。
「原理は、これまで多くの信徒たちが信じてきたように、イエスを神であると信じる信仰に対しては異議がない。なぜなら、完成した人間が神と一体であるということは事実だからである。また原理が、イエスに対して、彼は創造目的を完成した一人の人間であ

ると主張したとしても、彼の価値を決して少しも下げるものではない。ただ、創造原理は、完成された創造本然の人間の価値を、イエスの価値と同等の立場に引きあげるだけである。」

イエス様は、肉体をもってこられたことは、意義がないことと思います。ヨハネの第一の手紙４章２節に、「イエス・キリストが肉となってこられたことを告白する霊は、すべて神から出たものです」と書いてあります。そのことと、神と一体であることは、何ら矛盾するものではないと考えています。

2026.10.24.

フランスの暴動　日本で起きてはならない

統一教会の教えを否定する聖句③

まことに主なる神は／そのしもべである預言者にその隠れた事を／示さないでは、何事をもなされない。ししがほえる、だれが恐れないでいられよう。主なる神が語られる、だれが預言しないでいられよう」。（アモス１：7～８）

神はその計画を、為されることを予め全て預言されるのです。そして聖書の中には文鮮明を示唆するような預言は何一つありません。

【小笠原の反論(10/27)】

➔ 引用しているいのは、アモス１ではなく、アモス３ですね。

原理講論の「第二章　モーセとイエスを中心とする復帰摂理　第三節　イエスを中心とする復帰摂理」に、こう書いてあります。

「アモス書三章７節に、「主なる神は、そのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは、何事をもなされない」と記録されているみ言のように、聖書には、神の救いの摂理に関する数多くの秘密が隠されているのである。しかし、人間は神の摂理に対する原理を知らなかったので、聖書を見ても、その隠れた意味を悟ることができなかった。聖書においては、一人の預言者の生涯に関する記録を取ってみても、その内実は、単純にその人の歴史というだけにとどまるものではなく、その預言者の生涯を通して、堕落人間が歩まなければならない道を表示してくださっているのである。」

ということで、これも原理講論が想定している反論の範囲内ということです。

【よだきんぼさんの再反論(10/31)】

統一原理の十八番の手法ですね。簡単なことをわけわからないこと言ってこねくり回して煙に巻くという手法です。なぜ、もっと素直に聖書を読まないのでしょうか？

アモス書 3 章は、イスラエルの罪に対する神の裁きの宣告が中心です。実際、同じ章の直前では「主がなされるのでなければ、町に災が起るだろうか」 と述べられ、直後にはベテルの祭壇や豪奢な家々が滅ぼされる裁きが語られていますこの流れから、「隠れた事」とは神が密かに計画している裁きの内容であり、預言者を通して事前に明らかにされるものだと読み解くことが出来ます。

「隠れた事」と言っても、聖書を読めばわかることですが、預言が成就される前には神はその計画の全貌を預言者を通じて常に明らかにされています。例えばイエス様の誕生についてもそうです。最初はユダヤ民族から誕生するということしか明らかにされませんでしたが、後にユダ族から、さらに後にはダビデの子孫から誕生することが明らかにされました。

しかるに、文鮮明についてはどうでしょう。ほんの一節でも彼の誕生に触れている聖書箇所がありますでしょうか？イエスがやり残した使命を遂げる者が現れると示唆する箇所がありますでしょうか？私の認識ではまるっきりないんですよ。文鮮明は誕生どころかもう死んでいるのにそれでもまだ「隠された事」と言うのでしょうか？

【小笠原の再反論(11/2)】

まず、旧約聖書については、原理講論にその論拠が書かれています。

後編第 6 章第二節　イエスはいかに再臨されるか（一）「聖書を見る観点」に、こう書かれています。

「すべての預言者と律法とが預言したのは、ヨハネの時までである」（マタイ一一・13）というみ言、あるいは、「キリストは、すべて信じる者に義を得させるために、律法の終りとなられたのである」（ロマ一〇・４）と記録されているみ言を見ても分かるように、旧約時代には、メシヤの降臨をもって復帰摂理の全目的を完成しようとする摂理をしてこられたので、イエス御自身が、自ら再臨されることを言われるその前までは、一度来

られたメシヤがまた再臨されるであろうなどとは、だれも想像することができなかったはずである。」

だから、旧約聖書には、文鮮明師に関することは、書かれていないはずです。

それでは、新約聖書には、イエス様が再臨されることについて、どのように書かれているでしょうか。同じ再臨論の（二）「イエスの再臨は地上誕生をもってなされる」には、このように書かれています。

「ルカ福音書一七章 24 節から 25 節を見ると、イエスは将来、彼が再臨されるときに起こる事柄を予想されながら、「人の子もその日には同じようであるだろう。しかし、彼はまず多くの苦しみを受け、またこの時代の人々に捨てられねばならない」と言われたのであった。もしイエスが、聖書の文字どおりに雲に乗って、天使長のラッパの音と共に、神の栄光の中に再臨されるとするならば（マタイ二四・30、31)、いかに罪悪が満ちあふれている時代であろうとも、このような姿をもって来られるイエスを信奉しない人がいるであろうか。それゆえに、イエスがもし雲に乗って来られるとするならば、苦しみを受けられるとか、この時代の人々から捨てられるとかいうようなことは、絶対にあり得ないことといわなければならない。」

ここに、イエス様が再臨される時は、肉体をもって再臨されると説明しています。新約聖書で、「文鮮明」という名前は書いてありませんが、よだきんぼさんがおっしゃる通り、「預言が成就される前には神はその計画の全貌を預言者を通じて常に明らかにされています。」ということであり、文鮮明師の誕生においても、そのようなことが数多くあったと伝えられています。

2026.10.24.

フランスの暴動　日本で起きてはならない

統一教会の教えを否定する聖句④

「この方は、神の定めた計画と予知によって引き渡されたのです」(使徒言行録 2 章 23 節)

「まことに、ヘロデとポンテオ・ピラトとは、異邦人らやイスラエルの民と一緒になって、この都に集まり、あなたから油を注がれた聖なる僕イエスに逆らい、み手とみ旨とによって、あらかじめ定められていたことを、なし遂げたのです。」(使徒言行録　4 章 27～28 節)

イエスの十字架はあらかじめ予定されていた神の人類救済計画なのです。

【小笠原の反論(10/27)】

これについては、原理講論の第 4 章第 1 節第 5 項「十字架に対する予言の両面」に、イエスの十字架は人間の不信仰が懸念されるので、イザヤ書６０章「栄光の主」とイザヤ書５３章「十字架の道」の２通りの予言をしたと書いてあります。
よだきんぼさんは、原理講論のことはご存知のはずですが、イエスが来られる前のイザヤ書については触れず、イエスが十字架につけられた後に書かれた使徒言行録の言葉のみをもって、「十字架は最初から予定されていた」と主張するのは、原理講論が想定している反論の範囲内ということになります。

【よだきんぼさんの再反論(10/31)】
神は信じるべき神(宗教)について次のように語っています。
イザヤ 41 章
21 主は言われる、「あなたがたの訴えを出せ」と。ヤコブの王は言われる、「あなたがたの証拠を持ってこい。
22 それを持ってきて、起るべき事をわれわれに告げよ。さきの事どもの何であるかを告げよ。われわれはよく考えて、その結末を知ろう。あるいはきたるべき事をわれわれに聞かせよ。
23 この後きたるべき事をわれわれに告げよ。われわれはあなたがたが神であることを知るであろう。幸をくだし、あるいは災をくだせ。われわれは驚いて肝をつぶすであろう。

イザヤ書 44 章
6 イスラエルの王である主 イスラエルを贖う万軍の主は、こう言われる。 わたしは初めであり、終わりである。 わたしをおいて神はない。 7 だれか、わたしに並ぶ者がいるなら 声をあげ、発言し、わたしと競ってみよ。 わたしがとこしえの民としるしを定めた日から 来るべきことにいたるまでを告げてみよ。 8 恐れるな、おびえるな。 既にわたしはあなたに聞かせ 告げてきたではないか。 あなたたちはわたしの証人ではないか。 わたしをおいて神があろうか、岩があろうか。 わたしはそれを知らない。

イザヤ書 45 章

20 国々から逃れて来た者は集まって 共に近づいて来るがよい。 偶像が木にすぎないことも知らずに担ぎ 救う力のない神に祈る者。 21 意見を交わし、それを述べ、示せ。 だれがこのことを昔から知らせ 以前から述べていたかを。 それは主であるわたしではないか。 わたしをおいて神はない。 正しい神、救いを与える神は わたしのほかにはない。

イザヤ書 46 章

9 思い起こせ、初めからのことを。 わたしは神、ほかにはいない。 わたしは神であり、わたしのような者はいない。 10 わたしは初めから既に、先のことを告げ まだ成らないことを、既に昔から約束しておいた。 わたしの計画は必ず成り わたしは望むことをすべて実行する。 11 東から猛禽を呼び出し 遠い国からわたしの計画に従う者を呼ぶ。 わたしは語ったことを必ず実現させ 形づくったことを必ず完成させる。 12 わたしに聞け、心のかたくなな者よ 恵みの業から遠く離れている者よ。 13 わたしの恵みの業を、わたしは近く成し遂げる。 もはや遠くはない。 わたしは遅れることなく救いをもたらす。 わたしはシオンに救いを イスラエルにわたしの輝きを与えることにした。

イザヤ書 48 章

3 初めからのことをわたしは既に告げてきた。 わたしの口から出た事をわたしは知らせた。 突如、わたしは事を起こし、それは実現した。 4 お前が頑固で、鉄の首筋をもち 青銅の額をもつことを知っているから 5 わたしはお前に昔から知らせ 事が起こる前に告げておいた。 これらのことを起こしたのは、わたしの偶像だ これを命じたのは、わたしの木像と鋳像だと お前に言わせないためだ。

申命記 18 章

21 あなたは心の中で、「どうして我々は、その言葉が主の語られた言葉ではないということを知りうるだろうか」と言うであろう。 22 その預言者が主の御名によって語っても、そのことが起こらず、実現しなければ、それは主が語られたものではない。預言者が勝手に語ったのであるから、恐れることはない。

これらの聖書箇所をまとめますと、未来のことを預言(予言)できる神（宗教)を信じなさ

いと言っているのです。もし、予言の両面があるというのであれば当然外れる預言も出てくるわけですからこのように断言はできません。

①預言予言は外れることは無い
②受難（十字架への道）の主の預言
③栄光の主の預言
①～③の条件を満たすためには初臨のメシアは十字架に架かり再臨のメシアが栄光の主となって成就するしかありえないのです。

実際、ダニエル「70 週」の預言【ダニエル書 9 章後編】では初臨のメシアは「不当に断たれる」と預言され、再臨のメシアが「油を注がれる」と預言されています。

また、イエス様ご自身も旧約聖書に書かれている預言は全て成就されると言っています。
ルカ 24 章 44 節
「モーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就する」
イザヤ５３章は初臨のイエス様が、イザヤ６０章は再臨のイエス様が成就する預言なのですよ。

そして文鮮明も韓鶴子も「栄光の主」とはなれなかったのです。偽メシアだと断言できる根拠の一つと言って良いでしょう。

【小笠原の再反論(11/2)】
先ほどの再反論②の、十字架の預言の二面性について、ここでまとめて再反論します。
イザヤ書全編を、もう一度読んでみました。イザヤが活躍したのは、イスラエルが南北に分裂し、さらにアッシリアが北イスラエルを滅ぼし、南ユダも危機に瀕していた時のことですね。イザヤは、南ユダの王に対して、一貫して南ユダが復興することを預言していたようです。
イザヤ書全体を通して、栄光の主の話と苦難の主の話が、繰り返し登場するように思えます。
イザヤ書 52 章 13-15 節に、こう書いてあります。「見よ、我が僕は栄える。彼は高めら

れ、あげられ、はるかに高くなる。多くの人が彼のことで驚いたように、その姿は損なわれ、人のようではなく、姿形は人の子らとは違っていた。そうして、彼は多くの国民を驚かせる。王たちは彼について口を閉ざす。彼らは、自分たちに告げられていなかったことを見聞いていなかったことを悟るからだ」

これは、栄光の主の予言ですね。

その直後に、イザヤ書 53 節の、苦難の主の話が出てきます。

その後、イザヤ書 56 章 1 節にこうありますね。「主はこう言われる。公正を守り正義を行え。私の救いが到来し、私の正義が現れる時は近い」これは、国を救う、救世主が来られることではないでしょうか。

さらにその後、イザヤ書 57 章 1-2 節にこう書いてあります。「正しき人が滅びたが、誰一人心に留めなかった。慈しみ深い人々が取り去られたが、気づくものはいない。正しき人は災いのゆえに取り去られたが、平安に入る。正しく歩んできた人々は、自分の寝床で安らぐ」これは苦難の主の姿です。

そして、イザヤ書 60 章の、栄光の主の話が出てきます。

要するに、「栄光の主」と「苦難の主」の両方が、同じようにイザヤ書に登場します。これは、アッシリアにより滅亡の危機にある南ユダの王や民に対して、今は苦しいけれども必ず復興する、という希望を持たせる言葉を、イザヤは語ったのではないかと思います。それが、南ユダだけではなく、神を失って苦海を生きる人類に対する言葉として、今に生きているというのが、私の解釈です。

最後によだきんぼさんは、文鮮明師と韓鶴子師の話が出てきますが、二人は苦難の道を行っています。いわば「苦難の主」であって、「栄光の主」ではないかもしれませんが、それはまさに聖書の預言通りのことであって、よだきんぼさんの理論によっても、「偽メシアだと断言できる根拠の一つ」とはなりません。

2026.10.25

河村たかし氏の質問　社会主義になってはいけない

統一教会の教えを否定する聖句⑤

それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。（イザヤ７：１４）

「見よ、おとめがみごもって男の子を産むであろう。 その名はインマヌエルと呼ばれるであろう」。 これは、「神われらと共にいます」という意味である。(マタイ１：23)

マリアの処女懐胎を否定するとこの聖書箇所を否定することになる。また、イエスが神であることを否定すると「その名はインマヌエルと呼ばれるであろう」という箇所も否定することになる。

【小笠原の反論(10/27)】
生物学的には、男性と女性が交わらなければ、子どもは生まれません。そして、もし女性がいわゆる単為生殖したとしたら、女性しか生まれません。女性は x 遺伝子しかもっておらず、y 遺伝子がなければ男性が生まれる余地がないからです。
したがって、この聖句は、啓示として受け入れるべきです。
これは、これまでのキリスト教とは異なる概念です。しかし、それが統一教会の教えを聖書が否定しているということにはなりません。

【よだきんぼさんの再反論(10/31)】
イエス様はマタイ 9:5 で
「『あなたの罪は赦される』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらが易しいか。」
マルコ 2:9 で
「中風の人に『あなたの罪は赦される』と言うのと、『起きて、床を担いで歩け』と言うのと、どちらが易しいか。」
と律法学者たちに問うています。

それでは同じ手法で小笠原さんに聞きます。
「人間を一から創造する」のと「処女懐胎」はどちらが易しいか？

もしかして小笠原さんは神がアダムとエバを創造したのではなく、猿から進化したという認識なのでしょうか？

＞しかし、それが統一教会の教えを聖書が否定しているということにはなりません。

明確に否定しているじゃないですか！
聖書はメシアが処女から生まれ、人であり神であると教えています。

ちなみに「～は有り得ない」というロジックで奇跡や復活を否定していたのが当時のサドカイ派の人達です。統一教会の教理はまさにサドカイ派の人達と同じです。

それから小笠原さんや家庭連合おじさん信者に特に言えることなんですけれど、「ありえない」とか「不可能」と断定できるほど人間の知識は十分ではないという認識を持った方がいいですよ。例えば「量子のもつれ現象」など一昔前だったら「ありえない」で一蹴されていたはずです。ヨブ記が我々に教えてくれているのは人間には不可知なことがあるということですよ。

【小笠原の再反論(11/2)】
「～は有り得ない」というロジックは、私は使っていません。科学的に説明ができない、とお話しているのです。
神のことは恐れ多いから全てはわからない、という不可知論に逃げ込んでしまうと、議論は平行線になります。聖書の記述を、どのように受け止めるかは、人間の知性・霊性の発展によって、変わってくるはずで、誰でも理解できるように努力するべきです。
＞もしかして小笠原さんは神がアダムとエバを創造したのではなく、猿から進化したという認識なのでしょうか？
これについては、DNA 解析によって、猿と人類は、かなり早い段階で分岐したことがわかっています。だから、猿から進化したなんて、現代では解釈されていません。
それでは、神が人間を創造したことを否定するかというと、そうではありません。私は、人間と動物の決定的な違いは、生物学的な問題ではなく、霊的な問題だと考えています。統一原理では、神が人間を創造した目的は、親が子を産むように、自分と同じもとを持ったものを作ることだと説明しているので、そのような霊性を人間に与えたのが、アダムとエバであったと、私は理解しています。だから、化石など目に見えるものを分析しても、どこから先が人間なのか、それはわからないと思います。
科学という知恵は、神様が人間だけにあたえたものです。これを追及することは、神の意志に反するものではないはずです。だから、科学が発展することによって、神を否定

する方向に走ってはいけないし、逆に科学を否定して旧来の信仰に固執することもよろしくないと思います。